



TITLE:

Discourses of Japan in Anglophone Tourist Guidebooks: Transformations and Continuities Since the End of the 19th Century(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Daniel, Jerome Milne

CITATION:

Daniel, Jerome Milne. Discourses of Japan in Anglophone Tourist Guidebooks: Transformations and Continuities Since the End of the 19th Century. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-07-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19942>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	Daniel Jerome Milne
論文題目	Discourses of Japan in Anglophone Tourist Guidebooks: Transformations and Continuities Since the End of the 19th Century （英語の観光ガイドブックにおける日本の表象 —19世紀末から現代までの 変遷と継続に注目して）		
（論文内容の要旨）			
<p>本学位申請論文は、英語で書かれた日本に関するガイドブックに見られる観光言説の変遷と連続性を、1870年代から2010年代にかけて通時的に分析するものである。日本、英国、アメリカ、オーストラリアで発行された異なる文化的背景をもつガイドブックをとりあげ、その中での日本表象が、日本を「古い東洋」として西洋諸国との違いを強調する伝統的なオリエンタリスト的言説か否かを、日本と英語圏諸国との関係および日本社会の変化、ガイドブックの作者や編集者の方針や意識の変化にも留意しつつ考察する。</p> <p>本論文は、序論と九つの章で構成されている。序論では、グローバル化に伴い多様な国民、言語圏、文化圏が出会う場となる観光の重要性が認識される一方で、異文化間のテキストとしての観光ガイドブックに関するアカデミックな研究は、1990年代に入りようやく出現したことが指摘される。そのうえで、旅行者と目的地との関係を媒介し、他国や他国民の表象の形成に多大な影響を与えるガイドブックの緻密な分析の意義が強調される。</p> <p>第1章では、旅行記や百科事典などの他のジャンルとの比較を用いながら、ガイドブックの包括的な定義が試みられている。ガイドブックというジャンルは、主観的で自伝的な旅行記と違って、目的地の文化や歴史、地理や国民性に関する「客観的」で権威のある情報を旅行者に提供するものとして出現したとされる。このジャンルは、目的地について歴史的、社会的、地理学的な情報を提供し、かつ目的地での旅行者の安全や「現地人」の習慣に関して助言を与えるといった複数の目的を持ち、また、叙述的な文章、写真やイラスト、地図など様々な情報媒体の複合体でもある。ガイドブックは、こうした異種混交性故に、それ自体の特性を持つ独立したジャンルであると結論づけられる。</p> <p>第2章では、19世紀末から21世紀初頭にかけての英語圏におけるツーリズムおよび旅行ガイドブックの歴史を跡付けることで、本論文の歴史的・社会的な文脈を措定しようとする。この検証を通して、第一に、英語圏のツーリズムの発展は、植民地主義の拡大、二つの世界大戦、冷戦などの国際政治の動きと強く結びついていることが指摘される。第二に、当初は裕福なエリート層に限定されていた旅行者が、若者や学生、海外基地に駐屯する軍人、また大衆層へと拡大していったという社会的な変化が、ツーリズムおよびガイドブックの性格にも変化をもたらしたとされる。</p> <p>第3章では、サイード、プラット、ファビアンなどのオリエンタリズムに関する理論が議論される。申請者は特に、宗主国と植民地の力関係に基づいているオリエンタリスト的言説では、非西洋社会の古い文化や伝統が美化されるのに対し、現代文化は、単に古代史の継続ないしは劣等文化で重要ではないとされるという先行研究者の指摘に注目する。申請者は、この理論を植民地化されたことのない日本に援用することの妥当性を探るなかで、幕末から明治初期また戦後のアメリカ占領時代には「半植民地的」状況があったとし、日本への西洋のまなざしに、オリエンタリスト的な要素が存在しているとする。</p> <p>第4章からは個別のテキストとその政治的、社会的背景の分析がなされる。第4章では、東京遷都で疲弊した京都の再生に取り組んだ山本覚馬の英語による京都のガイドブックが取り上げられる。申請者は、覚馬が京都の近代化に貢献した人物であるにもかかわらず、この1873年出版のガイドブックにおいては、新しい京都ではなく、昔から変わらない伝統的な風景や名所が強調されていると指摘する。申請者はこれを、オリエンタリスト的言説を内在化させたセルフ・オリエンタリスト的言説とするが、同時に、こうした表象は、幕</p>			

末の混乱の中で悪名高くなった京都のイメージを払拭し、外国人観光客を呼び込むことで、京都の観光や地場産業を発展させようとする意図の現れでもあったとする。第5章では、1895年の産業博覧会の開催に合わせて京都市議会から委嘱され出版された京都に関する二冊のガイドブックを比較する。日本人（M. Ichihara）著・監修のガイドブックでは、欧米列強との不平等条約の改正に取り組んでいた時期、また日清戦争の時期でもあったために、京都の近代化が強調され、文化的に優越した国として日本が表象されているとする。他方、アイルランド人の日本学者（F. Brinkley）が書いたガイドブックでは、京都は女性化された存在として表象され、近代化は地域文化への脅威だとして叙述されているとする。

第6章では、19世紀末に最も信頼される日本ガイドブックとなった英国マレー社によるシリーズの第1版（1881）、第4版（1894）、第8版（1907）が検証される。アーネスト・サトウやバジル・チェンバレンのような外交官や日本学者が中心になって書かれたこれらのガイドブックでは、当初は西洋化によって危機にさらされている日本の過去と伝統文化が美化されたが、第8版では、日露戦争で、日本の軍事力や政治力が認識されるようになったことを反映して、伝統こそは日本の強さの背景であるとする論調に変化したとする。こうした変化にも関わらず、日本の近代的な側面を見逃し、西洋との差異を強調する点では、連続性が見られると指摘する。申請者は、日本の伝統と歴史を強調し、その悲劇的な消滅を予告するマレー・ガイドブックには、ロマンティック・オリエンタリズムとでもいうべき言説が支配的であるとし、これは近代化する英国とは異なる遠い異国に思いをはせた上流階級出身の英国人の心情と結びついているとする。

第7章では、第二次世界大戦中から戦後にかけてアメリカ軍が軍人の教育用に配布した日本に関するポケット版ガイドブックを取り上げ、その日本表象が、裏切りや策略に満ちた「敵」から、占領期の素直な教え子としての表象、また冷戦期の「自由な諸国家の一員」であるパートナーとしての表象まで変化したことを跡付けていく。こうした変化にもかかわらず、表紙などに無心に遊ぶ幼い少女、芸者、広島を街を楽しそうに歩く女性会社員などが描かれていることから、保護を必要とする弱い女性性として日本を表象するオリエンタリスト言説が生き延びているとする。

第8章では、オーストラリア人によって創刊された『ロンリー・プラネット』の日本ガイドブック・シリーズが、1980年代から2010年代まで検証される。ここでは、日本に関するガイドブックの読者が、中・上流階級から、低コストで冒険的な旅行を求める若者層へとシフトしたことにより、ガイドブックの形式が、客観的な叙述や助言から、より双方向的なものとなり、また目的地の裏情報などを交えた内容となっていくという。このシリーズでは、次第に典型的なオリエンタリスト言説から、日本をモダン、あるいは超モダンなものと伝統的なものの混合体として描く言説へと移行したと申請者は指摘する。その一方で、表紙の女性の姿や日本の風俗産業への関心など、アメリカ軍のポケット・ブックとも共通するエロティック・オリエンタリズムがみられたが、女性編集者が加わることで、性的な冒険としてのアジア体験といった要素は修正されていったとする。

各章での議論を整理した第9章では、日本に関する英語ガイドブックにおける日本表象が、時代によって変化しつつも、多様なオリエンタリスト的な言説からの意識的あるいは無意識の影響を受けていたと結論づける。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、英語で書かれた日本紹介の旅行ガイドブックにおける日本の表象と、その言説の変化と継続性を、1870年代から2010年代までの長い年月を視野に置いて考察したものである。山本覚馬などの日本人および日本在住の外国人が明治期に書いた京都ガイドブック、英国のマレー社出版の19世紀末から20世紀初頭にかけての日本旅行ガイドシリーズ、戦時中から米軍の発行したポケット版日本ガイドブック、オーストラリアのロンリープラネット社の1980年代から現代までの日本ガイドシリーズなど、複数の国で独自の文化的視点から描かれた日本ガイドブックを広く渉猟し、個別のテキストを精緻に分析している。同時に、個別テキストに見られる支配的な言説と社会的・政治的・国際的な背景との関係を巧みに浮かび上がらせている。異文化の出会いと交渉を媒介するメディアの一つとしての旅行ガイドブックを学問的考察の対象として選び、先行研究が比較的乏しい分野で新しい領域の開拓を試みた意欲的研究である。

第一に、本論文の優れている点は、旅行ガイドブックにおける他者表象、旅行者が他者や他国を見る際の眼差しに特に注意を向け、サイド他のポスト・コロニアリズム批評の理論を援用しながら、ツーリズムと植民地主義、娯楽、冒険、休息といった旅行の遊興的あるいは癒しの側面と現地人との関係における力や支配の論理との複雑な関係を読み解こうとしている点である。申請者は、西洋と非西洋を相いれない二元的存在として、非西洋の過去を美化しながらその現在を無化し、非西洋を保護されるべき脆弱な女性性を内包しているものとして見るという「オリエンタリスト的」眼差しが、はたして、日本に関するガイドブックにおいて支配的であるかということを一貫して問題にしている。この視点自体は、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズム批評のなかで特に新しいものではないが、今まで学問的価値のない軽い読み物とされてきた旅行ガイドブックに注目し、小説の分析などに用いられてきたテキスト分析を試みた点は、方法論的にも興味深く、優れた着眼点であるといえる。サイドもオリエンタリズム論のなかで、地理や歴史、写真などの視覚的要素が混じった旅行ガイドブックにおける他者の表象に関心を示しているが、実際の分析は行っていないことから、申請者は、旅行ガイドブック研究を通して、他者の表象をめぐる従来の議論に新しい素材を提供したといえよう。

第二に、本論文の優れている点は、日本、英国、アメリカ、オーストラリアで出版されたガイドブックを比較研究し、とくにシリーズで長期にわたって発行されたものに関しては、初期と後期の版を比べることで、特定のガイドブックとそれが書かれた時代との関係を丹念に検証していることである。例えば申請者は、京都産業博覧会とガイドブックとの関係、不平等条約や日清、日露戦争とガイドブックにおける日本の描き方との連関、覚馬が耳塚を京都の名所に加えた理由などに独自の考察を加えている。さらに、マレーシリーズに見られる日本表象と日英の外交的關係の変化、米軍のポケットガイドブックに見られる日米の軍事的関係と文化的関係の密接なつながりなどを実証的に検証することで、19世紀末から現代にいたる日本と英語圏の国々との関係史の一断面を切り取ることに、かなり成功しているといえる。

第三に、ガイドブックの書き手に関して、階級や職業、日本との関係を含めた伝記的背景を織り込むことで、書き手の出自や思想、価値観、当時の社会史的・思想史的背景とガイドブックにおける日本表象との関係が具体的に示されている点が評価できる。例えば、各国ガイドブックを出したマレー社がダーウィンやロマン派詩人などの作品を出版した英国知識階級にとって中心的な出版社だったこと、そしてガイドブックの書き手および読み手は、近代化によって喪失した自然や手工芸とのオーセンティ

ックな関係を非西洋に求める英国の知識階級の旅行者であったという指摘などは興味深いものである。さらに、非西洋社会で現実からの「トリップ経験」をしようとするヒッピー世代やバックパック世代とロンリープラネットとの関係など、旅行者の階級、ジェンダー、世代などに社会史的関心を払っている点は、本論文の議論を充実したものにしている。

このように極めて優れた論文であるが、幾つか今後の課題として残された点もある。例えば、オリエンタリズムを、ロマンティック・オリエンタリズムや二元的オリエンタリズムなど複数の要素の集合体としてとらえ、異なるタイプのオリエンタリズムが時間を経ながらどのように変化しているのかを議論しようとしているが、それぞれのオリエンタリズムの定義が必ずしも明確ではない。また、ガイドブックの読み手側に関する議論が不十分であり、それぞれのガイドブックが何部印刷され、購読されたのか、読者はどのような内容をガイドブックに期待したのか、といった点にも言及することができれば、より全体像が明確になったであろう。さらに、後半の米軍のポケットガイドブックの分析において、ガイドブックの読者が、観光客ではなく米軍関係者であるが故に独特の文脈が存在することに注意することが必要である。しかし、こうした幾つかの問題点は、今後の研究の継続によって十分に補正しうるものである。本学位申請論文は、カルチュラル・スタディーズ、テキスト分析、歴史研究、ツーリズム研究、国際文化交渉史などの複数の要素を統合させることで、旅行ガイドブック研究という新しい分野に優れた知見と視角を提供しており、とりわけ、学際的な研究を目指して創設された本研究科にふさわしい内容を備えているものといえる。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年6月21日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。